

補充資料

■「羅生門」発表の頃の芥川的狀況

1. 芥川龍之介「羅生門の後に」(『芥川龍之介全集 第二巻』一九九五 岩波書店)

この集にはいつている短篇は、「羅生門」「貉」「忠義」を除いて、大抵過去一年間——数え年にして、自分が二十五歳の時に書いたものである。そうして半ばは、自分たちが経営している雑誌「新思潮」に、一度掲載されたものである。

この期間の自分は、東京帝国文科大学の怠惰なる学生であった。講義は一週間に六七時間しか、聴きに行かない。試験はいつも、はなはだ曖昧な答案を書いて通過する、卒業論文のごときは、一週間で匆忙のうちに作成した。その自分がこれらの余戯に耽りながら、とにかく卒業する事のできたのは、一に同大 学諸教授の雅量に負う所が少くない。ただ偏狭なる自分が衷心からその雅量に感謝する事のできないのは、遺憾である。

自分は「羅生門」以前にも、幾つかの短篇を書いていた。恐らく未完成の作をも加えたら、この集に入れたものの二倍には、上っていた事であろう。当時、発表する意志も、発表する機関もなかった自分は、作家と読者と批評家とを一身に兼ねて、それで格別不満にも思わなかった。もつとも、途中で三代目の「新思潮」の同人になって、短篇を一つ発表した事がある。が、間もなく「新思潮」が廃刊すると共に、自分は又元の通り文壇とは縁のない人間になってしまった。それがかれこれ一年ばかり続くうちに、一度「帝国文学」の新年号へ原稿を持ちこんで、返された覚えがあるが、間もなく二度目のがやと同じ雑誌で活字になり、三度目のが又、半年ばかり経って、どうにか日の目を見るような運びになった。その三度目が、この中へ入れた「羅生門」である。その発表後間もなく、自分は人づてに加藤武雄君が、自分の小説を読んだという事を聞いた。断つて置くが、読んだという事を聞いたので、褒めたという事を聞いたのではない、けれども自分はそれだけで満足であった。これが、自分の小説も友人以外に読者がある、そうして又同時にあり得るといふ事を知った始めである。

次いで、四代目の「新思潮」が久米、松岡、菊池、成瀬、自分の五人の手で、発刊された。そうして、その初号に載った「鼻」を、夏目先生に、手紙で褒めて頂いた。これが、自分の小説を友人以外の人に批評された、そうして又同時に、褒めてもらった始めである。

爾来ほどなく、鈴木三重吉氏の推薦によって、「芋粥」を「新小説」に発表したが、「新思潮」以外の雑誌に寄稿したのは、むしろ「希望」に掲げられた、「風」をもって始めとするのである。

2. 芥川龍之介「あの頃の自分の事」(『芥川龍之介全集 第四卷』一九九六 岩波書店)

それからこの自分の頭の象徴のような書齋で、当時書いた小説は、「羅生門」と「鼻」との二つだった。自分は半年ばかり前から悪くこたわった恋愛問題の影響で、独りになると気が沈んだから、その反対になるべく現状とかけ離れた、なるべく愉快な小説が書きたかった。そこでとりあえずまず、今昔物語から材料を取って、この二つの短篇を書いた。書いたといっても発表したのは「羅生門」だけで、「鼻」の方はまだ途中で止まったきり、しばらくは片がつかなかった。その発表した「羅生門」も、当時帝国文学の編集者だった青木健作氏の好意で、やっと活字になる事ができたが、六号批評にさえ上らなかった。のみならず久米も松岡も成瀬も口を揃えて悪くいった。それから自分の高等学校以来の友だちの中には、一体自分が小説を書くのが不了見なのだから、匆々やめるがよいと意見の手紙をよこした男さえいた。

研究資料

■「羅生門」の『今昔物語集』の原話

1. 巻二十九第十八「羅城門登上層見死人盗人語」(池辺義象編『今昔物語 下 古今著聞集』一九一五 博文館)

今は昔、攝津の國邊より盜せむが爲に京に上ける男の、日の未だ暮ざりければ、羅城門の下に立隠れて立てりけるに、朱雀の方に人重り行ければ、人の靜まるまでと思て門の下に待立てけるに、山城の方より人共の數來たる音のしければ、其れに不_レ見えじと思て、門の上層に和ら搔つき登たりけるに、見れば火髻に燃したり、盗人恠と思て連子より臨ければ、若き女の死て臥たる有り、其の枕上に火を燃して、年極く老たる姫の白髪白きが、其の死人の枕上に居て、死人の髪をかなぐり抜き取る也けり、盗人此れを見るに心も不_レ得ねば、此れは若し鬼にや有らむと思て、怖けれども若し死人にてもぞ有る、恐して試むとて思て、和ら戸を開て刀を抜て、己はと云て走寄ければ、姫手迷ひをして手を摺て迷へば、盗人此は何ぞの姫の此はし居たるぞと問ければ、姫「己が主にて御ましつる人の、失給へるを繚ふ人の無ければ、此て置奉たる也、其の御髪の長に餘て長ければ、其を抜取て鬘にせむとて抜く也、助け給へ」と云ければ、盗人死人の著たる衣と姫の著たる衣と抜取てある髪とを奪取て、下走て逃て去にけり、然て其の上の層には死人の骸ぞ多かりける、死たる人の葬など否不_レ爲をば此の門の上にぞ置ける、此の事は其の盗人の人に語けるを聞繼て、此く語り傳へた

るとや。

2. 卷三十一第三十一「太刀帶陣売魚姫語」(池辺義象編『今昔物語下 古今著聞集』一九一五 博文館)

今は昔、三條の院の天皇の春宮にて御ましける時に、太刀帶の陣に常に来て魚賣る(イるナシ)女有けり、太刀帶共此れを買ひ(せイ)て食ふ(イふナシ)に、味ひ(イひナシ)の美かりければ、此れを役と持成して菜料に好み(イみなシ)けり、干たる魚の切々なるにて(イてナシ)なむ有ける、而る間八月許に、太刀帶共小鷹狩に北野に出で遊びけるに、此の魚賣の女出来たり、太刀帶共女の顔を見知たれば、此奴は野には何態爲るにか有らむと、馳て思寄て見れば、女大きやかなる籬を持たり、亦楚一筋を捧て持たり、此の女太刀帶共を見て、恠く迹目を仕ひて、只騒ぎに騒ぐ、太刀帶の從者共寄て、女の持たる籬には何の入たるぞと見むと爲るに、女惜むで不_レ見せぬを、恠がりて引奪て見れば、蛇を四寸許に切つゝ入たり、奇異く思て、此は何の料ぞと問へども、女更に答ふる事無くて_□て(イてナシ)立てり、早う此奴のしける様は、楚を以て藪を驚かしつゝ、這出る蛇を打殺して切つゝ、家に持行て鹽を付て干て賣ける也けり、太刀帶共其れを不_レ知ずして、買ひ(せイ)て役と食ける也けり、此れを思ふに、蛇は食つる人悪と云ふに何と蛇の不_レ毒ぬ(りイ)、然れば其の體慥に無くて切々ならむ魚賣らむは、廣量に買て食はむ事は可_レ止しとなむ、此れを聞く人云繚けるとなむ、語り傳へたとや。

■当時の芥川の抱えていた意識と心情―芥川の書簡より

1. 一九一五(大正四)年二月二十八日 井川恭宛書簡(『芥川龍之介全集 第十卷』一九九七 岩波書店)

ある女を昔から知つてゐた その女がある男と約婚をした 僕はその時になつてはじめて僕がその女を愛してゐる事を知つた しかし僕はその約婚した相手がどんな人だかまるで知らなかつた それからその女の僕に対する感情もある程度の推測以上に何事も知らなかつた その内にそれらの事が少しづつ知れて来た 最後にその約婚も極大体の話が運んだのにすぎない事を知つた

僕は求婚しやうと思つた そしてその意志を女に問ふ為にある所で会ふ約束をした 所が女から僕へよこした手紙が郵便局の手ぬかりで外へ配達された為に時が遅れてそれは出来なかつた しかし手紙だけからでも僕の決心を促すだけの力は与へられた

家のものにその話もち出した そして烈しい反対をうけた 伯母が夜通しな

いた 僕も夜通し泣いた
あくる朝むぶかしい顔をしながら僕が思切ると云つた それから不愉快な気ま
づい日が何日もつづいた 其中に僕は一度女の所へ手紙を書いた 返事は来な
かつた(中略)

空虚な心の一角を抱いてそこから帰つて来た それから学校も少しやすんだ
よみかけたイヴンイリイツチもよまなかつた それは丁度ロランに導かれてト
ルストイの大いなる水平線が僕の前にひらけつゝある時であつた 大へんにさ
びしかつた

2. 一九一五(大正四)年三月九日 井川恭宛書簡(『芥川龍之介全集 第十七巻』
一九九七 岩波書店)

イゴイズムをはなれた愛があるかどうか イゴイズムのある愛には人と人との
間の障壁をわたる事は出来ない 人の上に落ちてくる生存苦の寂寞を癒す事は
出来ない イゴイズムのない愛がないとすれば人の一生程苦しいものはない

周囲は醜い 自己も醜い そしてそれを目のあたりに見て生きるのは苦しい
しかも人はそのまゝに生きる事を強ひられる 一切を神の仕業とすれば神の仕
業は悪むべき嘲弄だ

僕はイゴイズムをはなれた愛の存在を疑ふ(僕自身にも)僕は時々やりきれな
いと思ふ事がある 何故こんなにして迄も生存をつゞける必要があるのだらう
と思ふ事がある そして最後に神に対する復讐は自己の生存を失ふ事だと思ふ
事がある

僕はどうすればいゝのかわからない

君はおちついて画をかいてゐるかもしれない そして僕の云ふ事を浅墓な誇張
だと思ふかもしれない(さう思はれても仕方がないが)しかし僕にはこのまゝ
回避せずによむべく強ひるものがある そのものは僕に周囲と自己とのすべ
での醜さを見よと命ずる 僕は勿論亡びる事を恐れる しかも僕は亡びると云
ふ予感をもちながら此ものの声に耳をかたむけずにはゐられない

3. 一九一五(大正四)年三月十二日 井川恭宛書簡(『芥川龍之介全集 第十七
巻』一九九七 岩波書店)

僕は愛の形をして *hunger* を恐れた それから結婚の云ふ事に至るまでの間(可
成長い 少くとも三年はある)の相互の精神的肉体的の変化を恐れた 最後に
最卑むべき射倖心として更に僕の愛を動かす事の多い物の来る事を恐れた し
かし時は僕にこの三つの杞憂を破つてくれた 僕は大体に於て常にジンリツヒ

なる何物をも含まない愛を抱く事が出来るやうになつた 僕はひとりで朝眼をさました時にノスタルジアのやうなかなしさを以て人を思つた事を忘れない そして何人にも知らるゝ事のない何人にもよまるゝ事のない手紙をかいてひとりでよんでひとりでやぶつたの事も忘れない

僕は今静に周囲と自分とをながめてゐる 外面的な事件は何事もなく平穩に完つてしまつた 僕とその人とは恐らく永久に行路の人となるのであらう 機会がさうでないやうにするとしても僕は出来得る限りさうする事にとめる事であらう 唯恐れるのは或一つの機会である しかしそれは唯運命に任せるより外はない

僕は霧をひらいて新しいものを見たやうな気がする しかし不幸にしてその新しい国には醜い物ばかりであつた

僕はその醜い物を祝福する その醜さの故に僕は僕の持つてゐる、そして人の持つてゐる美しい物を更によく知る事が出来たからである しかも又僕の持つてゐる、そして人の持つてゐる醜い物を更にもたよく知る事が出来たからである

僕はありのまゝに大きくなりたい ありのまゝに強くなりたい 僕を苦しませるヴァニチーと性慾とイゴイズムとを僕のヂヤスチファイし得べきものに向うさせたい、そして愛する事によつて愛せらるゝ事なくとも生存苦をなぐさめた

い